特集・都市と子ども❸

幼児の環境をめぐるリポート

自主保育の活動から

中川久美子

一――神経症の増加
二――狭められた子育ての空間
三――母親たちの連帯
四――弱者の世界を見つめよう

一――神経症の増加

県立子ども医療センターでは、昭和五十二年度の新患数のうち四六・八%にあたる二一八人が「神経症・心因反応」と診断されている。四十五年度では一七・五%、四一人であるから、患者数では約七倍の増加である。「神経症・心因反応」とは、子どもの場合、主として身体症状や行動面の症状としてあらわれる。身体症状では、夜尿・遺水、チック、頭痛・腹痛などが多く、行動面では、不登校、おちつきなし、夜驚、吃音、乱暴などという形であらわれている。また、この「神経症・心因反応」は、対人関係の始まる五、六歳から中学生までの間に多くみられる。

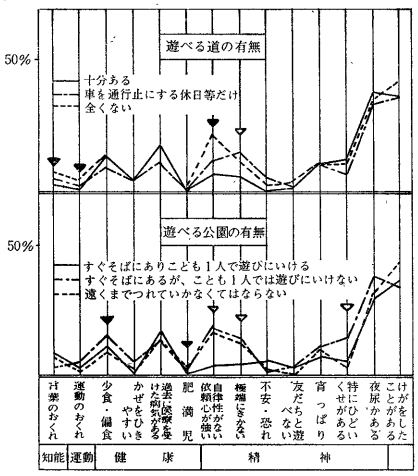
他の専門機関の相談の傾向はどうだろうか。中央児童相談所では、登校拒否、おちつきなし・多動、夜尿・頻尿・遺水などを含む「性向相談」が、四十八年の二八五件から五十二年の四三八件へ約一・五倍に増加している。さらに、市の青少年相談センターでは、五十二年度の総取扱件数のうち、学校恐怖症（登校拒否）が三五・二%を占め、二位の家出、外泊、浮浪を大きく上まわっている。各専門機関へ相談にくる経路や分類の方法に相違があるものの、「神経症・心因反応」の各症状を示す子どもたちの相談が目立って増えてきていることは、否定できないだろう。

こうした傾向について、県立子ども医療センターの精神科の田野先生は、「子どもは、毎日新しい経験をし、新しい場面にぶつかってもともとストレスの多いものだが、そのストレスを解消し、うまく処理してゆく力が弱まっているのではないか。その原因は様々だが、ひとつの典型として、母と子が面と向かい合って過ごす時間が長く、親の目が届きすぎる結果、過保護、過干渉になり、子どもの自立心の成長を阻げること、また社会的要因として遊びが少なくなって、心身の発達が阻害されてしまうこと、などが考えられる」と述べている。

この遊び環境と幼児の成長・発達における問題との関連性について、環境デザイン研究所が東京都の芝保健所の三歳児健診のさいアンケート調査を行なった。その結果をみると、たとえば、遊べる公園がすぐそばにあり、子ども一人でもいける場合といけない場合では、「依頼心が強く自律性がない」「極端にきかない」「特にひどいくせがある」という項目にかなり開きがある。遊べる道が十分ある場合とない場合とでも、「依頼心」と「極端にきかない」の項目でかなりの開きがある（図―1）。そして、「遊び環境の貧困は、三歳児の精神・情緒の面に影響を与える」（「建築文化」三六五号）と述べている。

小児療育相談センターの小児精神科の渡辺先生は、今の都市環境では「子どもが子どもらしい幼児期をすごす上で良い点が少しもない」と前置きした上で、幼児の精神発達の過程を次のように語っている。

図―1　物理的環境条件と成長の異常



「子どもの成長は、幼児期のうちでも○歳から三歳までは大変大切な時期で、家にたとえるなら土台づくりの時期。ここでしっかりとしたコンクリートの土台ができると、あとは安定し、たいていのことは乗り越えて行けるはずです。○歳では世話をしてくれる特定の人(主に母親)との間に絶対的な信頼感が必要で、まわりの働きかけや外界の感触が快よいと、生への肯定的な感情が芽ばえます。一歳ぐらいでは、母親と自分はまだ同じ輪の中に居ますが、その後、徐々に母親という頼りになる基地から外へ向かって自分を試してみたいという気持ちが芽ばえ、三歳になると、母と子どもは別々の輪になり、母子が分離します。その目安は、遊び仲間に入れるかどうか、いやなことがあっても耐えて、母を内面化する力がついているかどうか、また、仲間とけんかしてやりかえせるかどうか、一人で離れて現実に向かえるかどうかという点です。この時期には、母という基地を離れ、外にでていっても大丈夫な自由な空間や幼児の集団が是非必要です。大ぜいの中で自分の主張をだし相手と主張をぶつけ合う、そして自我が発達してゆくのです」。

たしかに、一歳をすぎた頃から幼児の目は外へ向かって輝く。自分と同じような小さな子どもたちの姿に吸いこまれるように魅入られてゆく時、幼ない精神にとって自立の第一歩が始まるのかもしれない。しかし、幼児が自由に出入りできる集団は、今の地域にはあまりない。大人の生活にとって、地域という場が意味を失ってきたのと対応して、幼児の生活にとっても地域という場の広がりはうすれた。大人同士は〝何かのため〟には結びついたり、話し合ったり、行動したりするが、幼児という面倒な〝まとまりのない全体〟を受け入れる力は、なぜか衰退した。そして、母と子は今、家の中で大部分をすごしている。その現実をまずみてみよう。

(注) 顔・頸・肩などの筋に不随意的痙攣運動をおこし、言語模倣症、運動模倣症などを来す神経疾患。

二――狭められた子育ての空間

❶―孤独な母親

かつて市立病院で小児科の医師をしていたことがある渡辺先生は、この頃の母親があまり赤ちゃんを抱かないことを不思議に思って、わけを聞くと、「抱き癖がつくと困るから」という答えが返ってきた。「この時期、赤ちゃんをしっかりと抱くことは大切なのに」と語っていた。また、八カ月になる赤ちゃんが標準体重をオーバーしたために、肥満になるのを恐れて規定量しか飲ませなくなり、お腹をすかせた赤ちゃんが泣きどおしに泣いている話。たいしたこともない夜尿症のことで涙をうかべ、「大丈夫、心配しないで」という保健婦の一言で、ほっと安心して帰ってゆく母親の姿。さらにこんな話も聞いた。

東北のある都市から結婚して横浜市内の民間アパートの一室に引っ越してきたある主婦は、妊娠の期間中いらいらしていた。その主な原因は、夫が毎晩仕事だと言って深夜遅く帰宅することだ。ほんとうに毎晩仕事なのだろうか、と疑わしい気持ちがあるからだ。毎日買物にだけは出るが、自動車を見ただけで疲れてしまう。知り合いもいないし、誰とも口を聞かずにアパートの一室で一日をすごしているという。

乳幼児家庭教育センターでは、育児についての電話相談が行なわれているが、五十二年度の相談者の内わけをみると、九二%が核家族、そして子ども数は一子、つまり初めての子どもが八二%、それも○歳が四二%と他年齢をぐっと離している。

世代の連携から切れ、地域のつき合いも少なく、父親の支援もなく、育児書とテレビの情報を頼りに、はじめて〝生命を育む〟という重い仕事にいどんでいる母親の孤独な状況があらわれてはいないだろうか。

しかも、母親は常に迷っているようにも思える。教育委員会の移動母親相談室が行なったアンケート調査では来談動機のトップが「よその母親の体験が知りたい」で三四%、「自分の教育のしかたがよいか確かめたい」二二%で、二つを合わせると五六%にもなる。

小児科医の中島俊彦先生は、「今の育児を考える」と題する小論で、「今の育児について、最も欠けていることの第一に、今のお母さん達は自分のこどもをよく把握していないのではないかと思われ

る場面に時々ぶつかります。その原因は色々あると思いますが、一つには育児書等により、自分のこどもについて充分理解する前に何か先入的にこどものイメージが出来ていて、これがもとになって、そのイメージと自分のこどもを比較しながらこどもに対しているように見受けられ、これがいろいろな混乱や不安を起していると思われることです。……こどもを育てるには先づ自分のこどもをよく知ること、それにはよくこどもを観察することから始めるべきです。赤ちゃんが生れたら、その瞬間から無心に赤ちゃんを見つめること、すべての先入観や雑音的情報に右往左往することなく兎に角一心にじっくり落ち着いて見つめ続けること、これが育児のスタートとして最も基本的なことです」と、書いている。

日頃、子どもを通して親の姿をみることの多い保育園の保母や園長も、子どもがのびやかに育つかどうかは「親が精神的にゆとりをもった生活をしているかどうかにかかっている」と口をそろえて言っている。

親が安定し精神的にゆとりをもっていると、子どもの心と素直に向かいあえる、ということなのだろう。

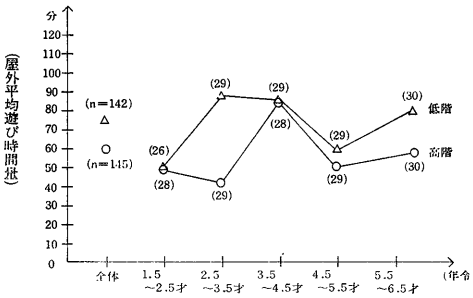
❷—発散できない幼児のエネルギー

「子どもは野外動物といっていいくらい、そとが好きです。家でどんなに泣いているあかちゃんでも、抱いてそとにでると泣きやみます。……二歳をこえた子どもが、部屋の戸をあけて家のそとにでたがるのは本能といってもいいでしょう。昔は三歳になったら、子どもは自由に戸をあけて、道路にでていきました」（松田道雄著『自由を子どもに』）。

それに比べて今の幼児は、一日のうちの大半を室内ですごしているようだ。

戸塚区のドリームハイツは八階から一四階建てまである高層住宅団地である。五十二年十月、この団地の幼児約三百名を対象に「外遊びの実態について」という生活時間調査が行われた。調査の趣旨は、高層住宅居住によって幼児の外遊びが減るのだろうか。またその結果幼児の心身の発達に影響がでてくるのだろうか、という点にある。したがってデータは低層に住む幼児と高層に住んでいる幼児との比較で繰づられているが、その結果が図—2である。外遊びの時間は低層で七五分、高層で六十分と約十五分の差。最も多い三、五歳〜四、五歳でも八十五分程度である。それに対して室内遊びの時間量は高層で二八二分と外遊び量の約四倍に達する。そのうち、テレビ視聴量は、平均一二九分で約半分である。

図—2　1日の外遊び量



注）幼稚園の外遊び量は集計に入っていない。
東京工業大学工学部社会工学科原研究室実施

さらに一週間の外遊び量は、「ほぼ毎日」が高層で五五%、低層で七八%、「週に二、三日」は一三%と九%であった。ここで注目されるのは、母親から離れて仲間を求める二、五才〜三、五才の時期に、「週に二、三日」「ほとんど遊ばない」が高層で二割、低層で一割もいることだ。

低層の外遊び量が若干多いものの、幼児は一日の大半を室内ですごしていることに変わりはない。以前の幼児が、ひまさえあれば外で遊びまわっていたのと比べれば、たかだが七十五分という外遊び量の少なさは、何か異様にすら感じられる。野外動物としての子どもの本能は出口を失ない、幼児の心身の中にうっ積しているのだろうか。

室内での生活はどうだろう。幼児をもつ親は民間アパートや公的賃貸団地に住んでいる場合が多い。二DK、三DKのスペースに置かれたカラーテレビ、ステレオ、箪笥、冷蔵庫、洗濯機の合間をぬって動きまわり、母親に「さわっちゃだめ」と終始口うるさく言われているにちがいない。もちろん、飛んだり跳ねたりするのも禁止されている場合が多いだろう。「あぶない」「早く」「きたない」……一日中母親に小言を言われて、動くこともままならない幼児が身をもて余し、エネルギーの出口を失ってかんしゃくを起こし、母親もいらいらし、……結局、テレビという簡単な子守り道具があてにされることになるだろう。

Aちゃんは今、二歳九ヵ月。一年前に父親の転勤で青森県から市内の神奈川区子安台に引っ越してきた。青森にいた時は、「野ばなし」の状態で遊んでいた元気のいいAちゃんにとって、コンクリートづめの都会生活は、どうもなじめないらしい。まず仲間はずれにされたAちゃんは、「これだめ、あれだめ」という母親の禁止の言葉のせいか「自家中毒」という病気にかかった。母親グループで子ども同士を遊ばせている時も、おもちゃの取り合いから、他の子の頭をすぐたたく。母親はきびしくしつけるのだ、と言ってAちゃんをそのたびにひどくたた

く。Aちゃんの兄のBちゃん四歳は、おとなしい性格でいい子。Aちゃんは母親が兄ばかりを可愛がっていると感じとりとても不安定な目で母親をみている。母親はそれに気づいていない。Aちゃんにとって、母親は窮屈な生活を強いて兄ばかりを可愛がる敵対者に映るのだろう。

こんな極端な場合ではないにしろ、エネルギーの出口を失った幼児の心身と、窮屈な生活を仕方なく強いる母親との小さな葛藤が、日常的に行なわれているのではないだろうか。一人で遊びに行ける場をもたない幼児に、親の言うことを「極端にきかない」場合が多いという調査結果がでていることは、すでに述べた。

ともかく、あまり動くこともできず、母親とテレビと絵本とおもちゃを相手に大半を室内ですごしている幼児の一日は、のっぺらぼうで充足感のないものにちがいない。エネルギーを発散したあとの心身ともに快よい疲れは、今の幼児にとってぜいたくなものになってしまったのだろうか。

ところで、松田道雄は次のように続けている。

「家のなかばかりでは、子どものからだがなまってしまうことをおかあさんは知っていますが、家のなかだけでは子どもの精神がそだたないことに、おおくのおかあさんは気がつきません。精神がそだつためには、自由をあたえなければなりません。子どもの精神が自由に競争しあってのびるのは、友だちとあそぶときです。」(前掲書)

では、友だちはどうだろうか。幼児同士の友だちづき合いには、母親同士のつき合いがかなり影響しているようだ。

「知らない家へ子どもが遊びに行くと気が重くなる」と多くの母親が語っていたように、母親が互いに親密になってはじめて、幼児という〝面倒でまとまりのない全体〟を引き受けることができるようになるのだろう。

昔、〝子どものけんかに親が口出す〟と親の態度が非難されたが、幼児同士が親にかかわりなくけんかできる空間は、今や貴重ですらある。室内で終始母親の視線の行き届く範囲にいる幼児が、たとえ母親に連れられて公園へ行っても、子どもは自由に遊べない。子ども同士がおもちゃの取り合いをすれば、「貸してあげなさい」「そんなことしちゃだめ」…と必らず口出しする。幼児の中のひとつの意志や思いがそうした母親の口出しでつぶされてゆく。口出しするのが良くないとわかっていても、気心の知れない同士ともなれば、何かを言わずにはいられない。母親がお互いに申し合わせでもしない限り、子ども同士の自由なやりとりは保障されないのだろうか。

ある保育園の保母さんは、幼児のけんかについて次のように語っていた。

「二歳から三歳にかけての幼児が、おもちゃの取り合いをするのはよくあること。危害を加えたりする以外は、なるべく口を出さないで見ていると、経験を重ねてそれなりに判断し、処理する方法を身につけていく。静かにふっと考える瞬間を与えることがとても大切だ」と。

また、ある園長は、育児の核心を「かゆいところに少し手が届かないぐらい」という言葉で表わしていた。そのわずかな距離が実は幼児が自立していくのに是非必要な場であり、時間であるとしたら、その場と時間をいかにつくりだすかは、緊急かつ重要な課題のように思われる。

三――母親たちの連帯

さらに、子どもの遊びについて母親たちは「いつも同じ子と同じ遊びをしているのであきてくる」とも言っている。遊び相手も遊び方も固定化してしまう、というのである。なぜだろう。子どもの遊びが発展し、子どもの自発的な楽しさを刺激するには何が足りないのだろう。おそらくは、いろいろな用途に変ぼうする遊び道具、土や砂や水や一本の縄や木や虫や……つまり自然と、その遊びを工夫して産み出す数人の仲間が、幼児の生活の延長線上にないのである。

今や、幼児の生活は、自然との関係、大人との関係、友だちとの関係、どれをとっても以前と比べものにならないほど貧しくなってしまった。かつて幼児をとりまいていた、なにかしらまとまりのない雑多な空間が、目的別に整備され、大人同士の秩序の中にとりこまれてしまった。道路は自動車のため、あき地はテニスコートに……と。それは、都市の中の緑や川の変貌と似ているような気がする。しかし、緑や川のように目に見えてはいないので。しかも幼児は何も言わないので気づかないだけだ。

幼児の集団を意図的につくろう。母親たちも仲間をつくって、子育てについて話し合おう。そんな試みが、市内に点のように存在していた。

❶―乳児の母親も参加―すみれ会

神奈川区西菅田団地の集会所では、三歳児二十二人と四、五歳児十七人が別々の部屋で保母さんと遊んでいた。どしゃぶりの雨の日だが、欠席の子どもはいない。三歳児の母親たちは、別室で話し合いをしている。まだ入会して日が浅いせいか、時々、「ママー」と泣きながら母親のところへ飛んでくる子、母親たちも子どものことが気になるのか落ち着かな

写真―1　母親たちの話し合い（すみれ会）

母親の学習グループ」である。母親がよりよい家庭教育を行うための活動で、話し合いの他、講師を呼んで勉強会もやる。したがって〇歳から二歳児をもつ母親の集まりも月二回開かれている。三歳児は一番多く、二十二名の二クラスが週一回づつ、四、五歳児は週五日制、お弁当持参、十二時三十分までである。団地の中の保母や教職の資格者が保育にあたっているが、木曜日は、保母は休みで母親が交代で保育する。

現在、総数七十三名にものぼる大所帯だが、もともとは〇歳～二歳児の母親グループが母体だった。子どもたちがあまりさわぐので知り合いの人に見てもらっていたのが三歳児の自主保育に発展した。当初から会で積極的に活動してきたある母親の話では、きっかけは一クラス四十名を超えるマス・プロ幼稚園への不満である。

「自分たちでやろうということになった時は、すごい意気込みでした。連日話し合いを続け、となりの団地の活動を見に行き、椅子や机も母親たちが作ったんですから。でも楽しかったですね。約束の時間より早く来て、『まだーっ』なんて待っている母親もいました。当時〇歳だった赤ちゃんがもう小学一年生になっています」と、懐かしそうに語る。

団地の一角の畑を借りて、菜園や花壇づくりもしている。手づくりのいちごをお弁当のデザートに食べたり、芋ほりをしたり、運動会など四季おりおりの行事も母親たちの手でこなす。しかし、何より良いのは、母親たちが自分の子どものことで神経質にならずに、客観的になれることだろう。母親同士が競争し合う関係ではなく、お互い余裕をもって子どもに接することができるようになる、そんな母親たちの関係が子育てにとってどんなに有益なことかはすでに述べた通りだ。

すみれ会の発起人である山本さんは、乳幼児家庭教育センターの電話相談員もしている。同センターでは、このような三歳までの子をもつ母親グループを地域につくっていこうと、電話相談をした人などに呼びかけている。現在、いくつかのグループができているが、会員の交代や転居で消えていくものもあり、仲間づくり、グループづくりは「根気のいる仕事」とあるリーダーは話していた。

神奈川区子安台の公民館では、二十畳ほどの座敷に、長い板ですべり台をつくって子どもたちが遊び、隣りの部屋では七人の母親が会の運営について話し合っていた。同センターから生まれたよつばグループの集まりである。

このあたりは、京浜工業地帯の裏手の住宅地。交通量が多く、しかもびっしりと整備された町中には、幼児が走りまわれる余地はほとんどなさそうだ。入会の動機をきくと、皆深刻だ。保健所の三歳児健診で遊び友だちを作りなさい、と言われ、三歳児保育の私立の幼稚園に行かせようとしたが遠くてかよえないので困っていたところ、リーダーの杉山さんに公園で声をかけられて入会したという民間アパート住まいのCさん。マンションの九階に住み、三歳と一歳の子どもがいるが、エレベーターと柵が危なくて、母親の目を離すわけにもいかず、遊び友だちもいないので杉山さんのさそいにとびついて入会したというDさん。二歳の子どもも友だちを欲しがらないし、会への参加が週二回はきつすぎる、どうしようかしら、と迷っているようすのEさん。またすでにあげた自家中毒をおこしたAちゃんの母親は、自分にとっても友だちが欲しくて入会した、という。

公営、公団の団地のグループとはちがって、住居形態もバラバラ、何かと集まりにくいこんな地域にこそ、最も必要とされる活動だろう。

❷―自然を子どもに―すぎの子会

「ワァーッ、プロ並みね」「すごーい」。プレハブの教室に足を踏み入れた母親たちは、口々に歓声をあげた。五月の連休あけの眩しいような日。子どもた

ちが近くのグラウンドに出かけてしまった午前中の合間に「すぎの子会」事務局の母親たちが集まってきた時のことである。教室の中には、数脚の座卓が並べられていた。F君のお父さんが、日曜大工で作ったというこの座卓、デパートの売り場に並べられても決して見劣りしないほどの見事な出来ばえである。設立からすでに四年目を向かえた「すぎの子会」いまだ健在であった。現在、四歳児二六名、五歳児十四名計四十名の子どもたちが、月曜日から金曜日までの毎日、通ってきている。年長組はお弁当をもって一時半まで、年少組は十一時半までである。

四年前、当時副会長の松本さんは、次のように語っていた。「今、開設を終えてホッとしたところですが、今まではレールの下の敷石を敷いただけで、これからコツコツとレールを敷き、そのうえに幼児教室という鈍行列車を走らせなくてはなりません。子どもたちにとってほんとうに必要なものは何か。試行錯誤をくりかえしながら、みんなで手さぐりを続けたいと思います。それはきっと即効薬のようなものにはならないでしょうが」（市民グラフ「ヨコハマ」'75／6）。

今、松本さんは「すぎの子会」OBとして年長組の保母さん役をやっている。創設者の一人でもある松本さんが語ってくれた幼児教室開設までのいきさつは、おおよそ次のとおりである。

松本さんたちが、ここ戸塚区ドリームハイツに入居したのは昭和四十九年のことである。幼児をもった母親にとって最大の関心は、子どもの保育のことである。上の子どもがすでに幼稚園に入っており、その保育の中味に疑問を感じていた松本さんら公園で知り合った三人の母親たちは、新聞の投書欄にのった保土ケ谷区の住民立の自主幼稚園の話に注目した。園舎もない青空保育であった。そこに見に行ったり、よんで話を聞いたりしているうちに、市の幼児教室があることを知り、「自分たちでもできる」という気持ちを深めた。近くの既設の幼稚園に全員入れそうにもなかったためもあって、この呼びかけには、たくさんの人たちが集まった。手始めに、三歳児を募集し、集会所を借りて幼児教室を始めた。しかし、翌年、幼稚園に入園させるかどうかは当面の問題であった。それと前後して、自治会の中に幼児問題特別委員会ができ、県の公社に対して幼稚園増設を働きかけていた。近くの民間幼稚園の増設が決定となり人数の上で入れるようにはなったものの、幼稚園との交渉過程で、園のあり方に対する疑問がでてきた。第一には、入園料保育料が家計を圧迫するほど高いこと、第二には、私立であるがゆえに経営本位にならないかということ、第三には、一クラスの人数が多すぎて、保育内容が画一化するのではないか、第四に、入園のためには二日前から徹夜の行列をしなければならないことである。結局、この増設運動の中心メンバーの中で「はたして幼稚園に入れることが必要かどうか」という問いにつきあたった人たちが、自分たちの手で望ましい保育の場をつくろうということになった。

『すぎの子会』創設にあたって」の趣意書には、次のように述べられている。「私達は幼児保育の場、イコール幼稚園、イコール園舎、イコール園庭、有資格保育者、諸設備がある、といった既成概念をすて、幼児にとって必要なのは、幼児一人一人をしっかり把握し、その成長をかげから助けてくれる良いリーダー、何人かの仲間、遊ぶための広い場所、豊かな自然であると考えます。」

母親たちの努力が始まった。まずは土地捜し。幸い団地のはずれのあき地を、月二万五千円の値段で地主さんが借してくれた。園舎は市の廃バスを安く買い取った。土をならし、柵をたて、プレハブの簡易トイレを作り、保母さんを捜し、ともかく費用が安くあがるようにできるものは全部自分たちで、という〝手作り教室〟であった。

近くのグラウンドから帰ってきた子どもたちは、手に手にすみれの花束や野草をもち、男の子の中には数匹の蛙をビニール袋に入れて持ち帰っている子もい

写真―2　"さばく"で山登り（すぎの子会）

写真―3　お店屋ごっこ（すぎの子会）

る。半袖シャツとズボンもドロンコで、キラキラと輝いている目が、何かをした後の子どもの目だ。年長組の子どもにとって最大の園の人気物は、一対の兎と二カ月前に生まれた六匹の小兎。「これ僕の」と言って終始抱っこしている子ども。飼育当番は、となりに広がる雑木林から雑草をとり、兎に与えている。子どもたちは赤ちゃんの小兎が可愛くてしょうがないようだ。兎小屋が小さくて二匹の兎を他にあげる話に、子どもたちはなごりおしそうな視線をなげる。年少組は、教室に入ると机がわりの木の箱を積みあげて階段をつくり、ロッカーの上から下のマットへ順々に飛びおりる。飛んだり跳ねたりは子どもたちの本能のようだ。

今年度の年間保育計画は、「自然の中で育つ」。お天気の日も雨の日も野外の野原ですごすことが多い。時にはあぶにさされても、そんなことで血相変える母親たちではない。「畑」に行って野菜の種まきをする。収穫した野菜を自分たちで料理して食べる。夏には、一泊のキャンプもある。秋には、自分たちで制作したマスコットを使っての運動会。年長組の卒園遠足は、なんと江の島まで徒歩五時間の道のりを励まし合いながら歩くという。文明の利器に頼らず、できるだけ自然という宝庫を利用して、体と心を鍛えてゆく、この保育方針、子どもたちの姿をみると確実に実っているようにみえる。

金曜日の午後、教室には七人の母親と二人の保母が集まっていた。保育の具体的中味を反省したり計画したりするカリキュラム班の会議である。母親は、毎日交代で助手として保育に加わっているので、子どもたちの様子がわかっている。そこに、ふいに現われたのはGちゃんのお母さん。Gちゃんは、言葉が他の子より少なく、時々、他の子の頭をたたいたり髪の毛をつかんだり、勝手な方に行ってしまったりする。入園当初から、Gちゃんをめぐっては、議論が百出、母親たちは何度も壁につきあたったという。しかし、子どもたちの方が母親たちより先にGちゃんを素直に受け入れた。その子どもたちの姿をみて、ある母親は「健全な親の方が欲をとられた思い」だったと語っている。しかし、一年たった今でも、まだまだGちゃんの母親の気づかいは絶えないのだろう。

「Gちゃんの存在が、子どもたちに負担になっているんじゃないかしら。助手が、年中Gちゃんだけにかかりっきりになってしまうのも問題だわ」、とある母親。

「そうは思わないわ。Gちゃんの存在で、子どもたちが気を使いすぎているようにはみえない。ただ、対等の遊び相手にはなっていない感じがするけど」

「このクラス、どういうわけかまだまとまりがないの。一緒に遊ぶという雰囲気がなくて、個別接渉して遊んでいるという感じ。だかGちゃんとの関係もクラス全体の問題として考えてゆきたいわ」と保母さん。

率直な討論の中にも難しさが顔をのぞかせている。これでもってでき上がり、ということのない長くて根気のいる子育てという仕事。決っして○×で割り切ることのできない子どもへの評価。動き始めた鈍行列車の課題はつきないようだ。しかし、何よりも、すでにあるものに頼らない母親たちの生きる姿勢が、子どもに何かをもたらすにちがいない。「大変な思いをすることが楽しい」と感じられる感覚が、母親たちにある限り、この「すぎの子会」は健在だろう。

❸—幼稚園予備校化の心配

ある団地の集会所では、三歳児の自主保育活動のあり方をめぐって活発な討論がなされていた。五年目を迎えたこの自主保育の会は、三歳児だけの一年保育ということもあり、会員の移動がはげしく、しかも百名を超える大規模となったため、会員同志の結びつきも弱くなってきた。討論の中には、設立当時の苦労を背負ってきた母親たちと、新しい母親や保母との意識の相違がみられる。

実際に、発足の当初保母は入会希望の母親と面接し、保育内容について討論を重ね、団地の障害児を積極的に受け入れるなど熱意あふれる活動を行ってきた。

たとえばS君をめぐって、保母、子どもたち、母親が理解し合うまでのいきさつが、こんな風に綴られている。

「S君は、ことばで意志を伝える事ができず、『あぶないよ』『あぶないよ』のことばを繰り返しながら部屋中を動き回ったり、時に大声で泣き叫んだり、奇声を発したりする事がありました。保育中、急に姿が見えなくなって保母達が必死になってさがし回ると、トイレの水を流し、その中に手を入れて喜んでいたり、表通りに出てフラフラしていたり……」という状態だった。母親は自分が病気で、S君が赤ちゃんの時、二年間ほど親戚をたらい回しされたため落ち着きがなくなったのだと主張し、病院で検査を受けることをかたくなにこばんでいた。S君を特別な目でみない普通児のこだわりのなさに救われながら、保母の必死の努力が続く。「二学期の半ば出席をとっている時、いつものように『S君』と呼ぶと、はじめて『はーい』とお返事、仲間たちは『お返事ができたよ』と大合唱、どこからともなく拍手がわきおこりました」。保母の熱心さもあって、母親

もようやくわが子の行動に不審を抱くようになり三学期の初め、医療センターへ通うようになった。

ところが、こんな熱意に支えられていた会も、余裕がでてくるにつれ、「お金でわり切って安易に入会する親」が増えてきた、というわけである。それと同時に保育内容も少しずつ変わり、どろんこの外遊びから、一列に並ぶことや歌を覚えたり、お絵描き中心の「幼稚園の予備校」になりつつある。そんな状態に対し危機感を感じた古い人から、「たとえ人数が減っても、保育の質を問い直してもう一度出発すべきだ」という意見も出される。しかし、初期の人々の啓蒙的な態度が、新しい母親や保母の意欲をかえって減退させているような一面もみられ、中盤戦を迎えた活動の難しさをのぞかせていた。

多くの問題をかかえた自主保育活動であるが、場所も大きな課題である。団地の集会所や町内会館などを利用している場合が多い。他のサークルや同好会の活動が活発化してくる中で使用に際して優先権をもち得るのかどうか。活動に対する自治会や一般住民の理解度がかなめになるようだ。だが、場所があるのはまだ良い方で、園舎のない青空保育の場合は、雨が降れば中止である。小規模な母親グループになると、個人の家を持ち回りで提供することにもなる。

さらに問題なのは費用の点。三歳児の場合は、たいてい週二回、午前中である。保育料は千円～三千円までの間が多い。保母の給料、教材費、母親が勉強するための研修費、おやつ代、赤字にならないように運営するのが大変なようだ。行政側の対応としては、母親クラブには県から年間八千円、乳幼児家庭学級には国と市が½づつ年間十万円、また幼稚園類似施設として認められているところには、幼稚園並みに、年長児に年額一万三千円、年少児に一万円の補助金が出されている。こうした行政のかかわり方に対し、場所はともかく費用負担の増額を望む声は強い。

また、三歳児の集団保育の中で、障害児がはじめてあきらかになる場合、保母がその子にどのように接していったらよいのか、母親にどのように伝えたらよいのか、悩みは大きいようだ。

四――弱者の世界を見つめよう

自然や動物との接触、たくさんの仲間、飛んだり跳ねたりできる自由、母親のゆとり、父親の参加、子育てにとって欠くことのできない要素が、このような自主保育の活動にはみられる。多くの矛盾や困難さを抱えた活動だが、その中で、つちかわれていく母親たちの確かな目が、何よりも貴重な財産だろう。

横浜市内四ヵ所における子どもの遊び空間量を、十五年前と比較した調査がある（四十九年環境デザイン研究所実施）。それによると、自然のスペースは約百七十分の一に、オープンスペースは約四分の一に、アナーキースペース（古い防空壕や工事現場、廃墟）は約二四分の一に、アジトのスペース（秘密基地、秘密の場所）は、約十分の一に、道のスペースは約三分の一に減っている。一方、子どもの交通事故の全事故に対する構成率は、件数において、昭和四十三年の一六、一％から五十二年の二六、九％へと一〇％以上増加している（神奈川県）。

子どもの生存し生活する場が、いかに狭められてしまったかは、母親が一番良く感じているはずだ。都市の中の弱者、もの言わぬ弱者の世界の変貌とゆがみを肌で感じとること、しっかりと見つめること、そこに、母親たちの連がりの第一歩を見出せないものか、とつくづく思う。

〈都市科学研究室〉